

新刊紹介 雷海龍著『漢代遣冊衣食住行類名物集釈与疏証』

(科学出版社、二〇二四年一〇月、五〇六頁、定価二六八人民元)

章 瀟 逸

中国・科学出版社「武漢大学簡帛叢書」シリーズの一冊として刊行された本書は、武漢大学簡帛研究中心・雷海龍氏の初の著書である。著者は長年にわたり、「遣冊」と呼ばれる一種の特殊な副葬簡牘資料の研究に携わってきた若手研究者である。著者により二〇二〇年一月に提出された同題の博士学位論文が、本書のベースとなっている。その題名が示すように、本書における主な研究対象は「漢代の遣冊に見られる衣食住行に関する名物」であり、研究手法として「集釈」と「疏証」を用いる。以下、これらについて解説を加えながら、本書の内容および学術的貢献について簡略に紹介しておきたい。

著者はかねてより古代中国の出土簡牘資料・文字学、および考古学と物質文化に関心を寄せてきた。これらの分野を繋ぐ一つの接点になり得るのが、「名物」の研究である。「名物」という語は古く『周礼』に見られるが、人々が具体的なモノを認識した上で、それらを区別するために付けた特定な名称のことをいう。物質文化全般に関わる、古代人が使用した名詞を内包しうる広い概念である。

本書では、「衣食住行」に関する名物がとりわけ注目される。中国語では、日本語でもおなじみの「衣食住」に「移動・交通」を意味する「行」が加えられ、「衣食住行」の四字で熟する。いずれも日常生活の基盤を為す不可欠な要素である。かかる名詞の意味を究明するこ

とは、古代の暮らしを復元するための基礎的作業であり、重要な学術的意義を有する。著者はこの問題意識を念頭に、研究を進めてきた。

本書が主に扱う出土資料「遣冊」とは、戦国時代から漢代にかけての墓葬から出土した簡牘の一種で、葬礼に必要な副葬品や供物などの名称および数量を記載したりリストであり、竹簡の形式をとるものが多い。「遣冊」という呼称は、現代の研究者が『儀礼』既夕礼の「書遣於策」なる語から付けた通称である。遣冊が出土した漢代の墓葬は主に長江中流域に分布し、代表的なものとして湖北省荊州市の鳳凰山漢墓や、湖南省長沙市の馬王堆漢墓が挙げられる。このほか、衣類や手回り品を書き出して納棺したリストで、「衣物疏」「衣物名」「衣物数」などの題名が書かれた木牘、通称「衣物疏」も散見される。さらに、副葬された品物に附せられた付け札・「楬」も存在する。著者は時代を漢代に絞り、正式な考古調査で発掘された計36基の墓葬から出土した簡牘と、そのほか非考古発掘簡牘2種類の資料を網羅した。こうした資料には当時の人々が使用した名詞が多く残され、ときおり同一墓葬からの出土物と照らし合わせることも可能であり、その貴重性は極めて高い。

様々な資料に残されている諸々の名物は、一体どのような意味を有するのか。それらを用いて、古代の人々は一体どのようなモノを指し

たのか。かかる名詞を考証する作業が、名物の研究において最も基礎的、同時に最も重要な一環と言えよう。著者は「集釈」と「疏証」の手法を採用し、考証を行っている。「集釈」は先行研究の意見を網羅して示し、そのうえ必要に応じてそれらに補足ないし検討を加えるコメント「按語」をつけることをいう。「疏証」は特定の名詞についての簡記ないし小論文である。「襪」「杯」「銚」「輦車」などの条のように、伝世文献・出土文献・画像資料・出土実物など、多様な資料を幅広く駆使した考証の文章は非常に読み応えがある。その議論はモノの名称や形式の考察にとどまらず、古代の人々の日常生活上の機能や習俗・文化における意味にまで及び、時には先行研究の問題点を鋭く指摘しており、著者の造詣の深さが窺える。

本書は四章に分かれ、それぞれ紡織品（織物）と服飾、飲食器・炊事道具、住まいの道具、車船に関する名物を取り上げ、逐一集釈・疏証を加えている。その目次は以下の通りである。

緒論

第一章 紡織品与服飾

第一節 紡織品

第二節 服装

第三節 佩飾

第四節 雑物

第二章 飲食

第一節 食器

第二節 飲器

第三節 炊器

第三章 起居

第一節 臥坐之具

第二節 化粧与洗沐之具

第三節 熏香之具

第四節 雑物

第四章 車船

第一節 馬車

第二節 牛車

第三節 輦車

第四節 船

結語

著者の緻密な考証により、一部の資料においては従来の釈文が訂正され、また香港中文大学蔵遺冊や近年出土の海昏侯漢墓木牘などの資料における未釈読文字もいくつか判読されるようになり、テキストの完成度が高められ、さらに馬王堆漢墓など、同一墓葬より出土した遺冊の記載とその副葬品との対応関係についても、従来の見解と異なる所説が提起されている。ほかにも新たに解釈の可能性が提示された名物や出土実物が書中に散見される。秦漢時代の出土文献・物質文化や生活史の研究にとって、本書は高い参考価値を有するに違いない。

しかしながら、本書には索引が附録されておらず、読者による参考・利用に支障をきたしかねない。著者にはぜひ本書の索引を作成し、何らかの形で公開していただきたい。利便性の向上により、本書がより多くの研究者に利用・評価されることを望むためである。

また、集釈と疏証の基礎作業ですでに膨大な紙幅を費やした本書では叶わなかったが、名物の研究を通して、著者により漢時代の生活史像が新しく描き出されることを、評者も非常に期待している。

（武漢大学簡帛研究中心PD研究員）